多摩市立瓜生小学校

瓜生小だより

平成３０年度　第１１号
平成３１年１月８日

二つのありがとう

校長　吉田　正行

新年あけましておめでとうございます。冬季休業中、ご家族や親戚等と笑顔あふれるお正月を過ごされたことと思います。学校も今日から３学期がスタートし、校舎内外に響く子供たちの声と共に活気がでてきました。

２０１９年は新元号となる年で、新しい時代の幕開けとなる歴史的な一年になります。特別な年の始業式に「新年を迎える心構え」と「ありがとうにも二つある」という話をしました。

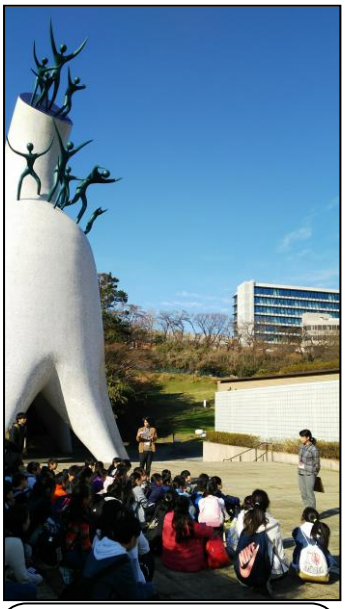
私は小さいころ、箸（はし）の持ち方が上手ではありませんでした。うまく物をつまめませんから、煮物の芋などは刺して食べていました。親からも直すように言われていましたが「食べるのには不自由しないからこれで平気さ」と思っていました。

しかし、高校１年生の時に転機が訪れました。親友のＡ君が毎日一緒に弁当を食べるたびに「箸の持ち方、うまくないね。直した方がいいよ」と言うのです。毎日言われるものですから、だんだんと嫌になり「食べるのには困まらないからいいんだよ」と強く言い返し、険悪な雰囲気になったこともありました。

何回も言われるので、だんだん悔しくなり、家に帰ってから箸の持ち方を練習するようになりました。祖母に相談すると「箸で小豆をつまむといいよ」と教えてくれ、毎日必死で練習しました。少しずつ持ち方がうまくなり、ある日の昼食の時間、Ａ君から「あれ、箸の持ち方がうまくなったね」と驚かれました。褒められてとても嬉しかったことと「ありがとう」と思ったことを今でも覚えています。もし、Ａ君が箸の持ち方を注意し続けてくれなかったら、きっと今でも箸の持ち方は下手なままだったでしょう。そこで感じたのは“本当に「ありがとう」と思うことはすぐには分からないのだ”ということです。

私たち大人は、子供たちの喜ぶ顔が見たいがために、欲しがるものを安易に与え、苦労をさせないようにしがちです。子供は欲しいものが手に入ったり、自分が望むことができたりすれば「ありがとう」という気持ちになるでしょう。しかし、もう一つの「ありがとう」があると思うのです。それは、その時は嫌だなと思ったことでも、指摘されたことが悔しくて努力し、後からできるようになったり、あいさつなど厳しく躾けられたお陰で、社会に出てそれが役立ち、その時の助言に感謝したりすることです。

何年か前のあるテレビ番組で、全盲の女の子にトライアスロンをさせる母と娘のドキュメンタリーをやっていました。その母親は「私がいつまでもこの子をかばっていくことはできない。だから、この子が自分で何にでも挑戦する強さを身に付けさせることが必要なのです」と言っていました。まさに「大人は、子供が望むことをしてあげるのではなく、子供のためになることをする」だと感心しました。



６年岡本太郎美術館見学
挨拶や鑑賞態度の良さを褒められました。日頃の取組の成果です。

学校の教育活動でも教職員は子供たちにノートを丁寧に書く、悪いことをしたらきちんと謝るなど、その子が嫌がっても成長に必要であれば、時間をかけて伝えたり、できるまで見守ってやらせたりすることもあります。

新しい年を迎えました。年頭にあたり、子供たちが、将来「ありがとう」と思えることを大切にして、学校も家庭も地域もさらに協力して活動する一年にしたいと思います。本年もどうぞよろしくお願いいたします。